

## コロナ前とコロナ後 わすれたくないこと

2020年6月  
眞鍋由比

『コロナ時代の僕ら』 パオロ・ジョルダーノ著 ハヤカワ書房 2020

6月10日、関西地方が梅雨入り。11日、自宅にアベノマスクがとどく。10%の割合で虫がついたりして不潔な可能性があるかと聞いていたので、透明袋の上から凝視したが、どうやらきれいそう。ロンドン博物館がパンデミックとなっている新型コロナウイルスに関連する資料の収集を開始した(美術手帖headline2020.5.3)ときいた。ここはシャーロック・ホームズ展をやっていたときに行ったりして思い入れもある場所なので、ぜひ悪名高いアベノマスクを寄贈と思っていたのだが、存外きれいそうなので、どこか必要なところに寄付しよう。コロナ前とコロナ後でマスクほど価値が変わったものもないだろう。そしてテレビ番組をみているとき、人物が間隔をあけているか、リモートの画面があるかでコロナ前の収録かどうか考えている。笑点がりモートで行われるなんて誰が想像したろう。

シェイクスピアは生涯3度の感染症流行(パンデミック)に遭遇したとか。息子を病で亡くしたと思っていた彼が、息子の死因に疑問を持ち妻を問いただして...というのが映画【シェイクスピアの庭】の肝。あの時代だけでなく人類の歴史でパンデミックは繰り返している。

この『コロナ時代の僕ら』はまさにこの2月に書かれた、イタリアの作家・数学者がコロナ禍のなか思ったことをつづったエッセイ。数学者らしく理の通った説明で感染症について考えたことが述べられる。パーティでのハグキスが基本のイタリアで、どちらも用心のためにやらなくて、気味悪がられている2月の彼。でも今はイタリアでも握手もしないだろう。慎重なお父さんがスピード違反について説明するくだりのおそろしさはよくわかった。感染症が倍々ではなく指数的にそれこそ爆発的に増加していく恐ろしさ。しかしそれが科学のルール。でも血の通った説明もある。「中国にある軍事施設からウイルスが持ち出されて」、「ビル・ゲイツは実は知っていて」などという陰謀論は本当に信憑性がない。いろいろなところで人類が貪欲に生態系を侵して食べてはいけないもの触れてはいけないものまで消費し始めたおかげで起こった災厄だというのが彼の主張。

そして忘れないようにしよう。コロナ禍のときに起こったことを記録しておこう。

日本の状況について、病院は余剰のあるほうがいい。医療崩壊は文字通り地獄だ。ましてや命をかけてコロナの治療にあたってくれている医療従事者にボーナスがいかず、居眠りしているような代議員の方々がボーナス満額もらえるってどうだろう。

三ノ宮のセンター街に人っ子一人いない昼間なんて考えられる? 元町商店街だって。写真を撮っている人を見かけたけど、確かにSFの世界にいるような不思議な気持ちになった。学校が3ヶ月も長期休校になったことも記録的。(もちろんその間仕事はしていましたよ) 今年オンライン授業普及の元年になるのだろうか。

リンドグレーンの日記を読んで、スウェーデンのひとがナチスよりもはるかにロシアを恐れていたことが意外だった。現在の日本の状態も後の人からみれば意外なことがたくさんあるのではないかしら。同じ過ちをおかさないよう、しっかり伝えていかなくては。